

夏目漱石

夢十夜



夢
十
夜

第一夜

こんな夢を見た。

腕組をして枕元に坐っていると、仰向あおもむきに寝た女が、静かな声でもう死にますと云う。女は長い髪を枕に敷いて、輪廓りんかくの柔らかな瓜実顔うりざねがおをその中に横たえている。真白まっしろな頬の底に温かい血の色が程よく差して、唇くちびるの色は無論赤い。到底死にそうには見えない。然し女は静かな声で、

もう死にますと判然はつきり云った。自分も確たしかにこれは死ぬな
と思った。そこで、そうかね、もう死ぬのかね、と上か
ら覗のぞき込む様にして聞いてみた。死にますとも、と云い
ながら、女はぱつちりと眼を開けた。大きな潤うるおいのある
眼で、長い睫まつげに包まれた中は、只一面に真黒であつた。
その真黒な眸ひとみの奥に、自分の姿が鮮あざやかに浮かんでいる。
自分は透き徹とおる程深く見えるこの黒眼の色沢つやを眺め
て、これでも死ぬのかと思つた。それで、ねんごろに枕
の傍そばへ口を付けて、死ぬんじやなかうね、大丈夫だろ
うね、と又聞き返した。すると女は黒い眼を眠そうに睜みはっ

たまま、やっぱり静かな声で、でも、死ぬんですもの、仕方がないわと云った。

じゃ、私の顔が見えるかいと一心に聞くと、見えるか
いって、そら、そこに、写ってるじゃありませんかと、
にこりと笑って見せた。自分は黙って、顔を枕から離し
た。腕組をしながら、どうしても死ぬのかなと思った。
しばらくして、女が又こう云った。

「死んだら、埋めて下さい。大きな真珠貝で穴を掘つ
て。そうして天から落ちて来る星の破片かけを墓標はかじるしに置い
て下さい。そうして墓の傍に待っていて下さい。又逢い

に來ますから」

自分は、何時いつ逢あいに來るかねと聞いた。

「日が出るでしょう。それから日が沈むでしょう。それから又出るでしょう、そうして又沈むでしょう。——赤い日が東から西へ、東から西へと落ちて行くうちに、——あなた、待っていていられますか」

自分は黙もくって首肯うなずいた。女は静かな調子を一段張り上げて、

「百年待っていて下さい」と思い切た声で云った。

「百年、わたくし私の墓の傍そばに坐まって待まちっていて下さい。きつ

と逢いに来ますから」

自分は只待っていると言えた。すると、黒い眸ひとみのなかに鮮に見えた自分の姿が、ぼうつと崩れて来た。静かな水が動いて写る影を乱した様に、流れ出したと思つたら、女の眼がぱちりと閉じた。長い睫の間から涙が頬へ垂れた。——もう死んでいた。

自分はそれから庭へ下りて、真珠貝で穴を掘った。真珠貝は大きな滑なめらかな縁の鋭どい貝であつた。土をすくう度に、貝の裏に月の光が差してきらきらした。湿つた土の匂においもした。穴はしばらくして掘れた。女をその中

に入れた。そうして柔らかい土を、上からそつと掛けた。掛ける毎たびに真珠貝の裏に月の光が差した。

それから星の破片かけの落ちたのを拾って来て、かろく土の上へ乗せた。星の破片かけは丸かった。長い間大空を落ちている間に、角が取れて滑かになったんだろうと思った。抱き上げて土の上へ置くうちに、自分の胸と手が少し暖くなった。

自分は苔こけの上に坐った。これから百年の間こうして待っているんだなと考えながら、腕組をして、丸い墓石を眺めていた。そのうちに、女の云った通り日が東から出

た。大きな赤い日であった。それが又女の云った通り、やがて西へ落ちた。赤いまんまでのつと落ちて行つた。一つと自分は勘定した。

しばらくすると又唐からくれない紅てんとうの天道のぼがのそりと上つて来た。そうして黙って沈んでしまった。二つと又勘定した。

自分はこう云う風に一つ二つと勘定して行くうちに、赤い日をいくつ見たか分らない。勘定しても、勘定しても、しつくせない程赤い日が頭の上を通り越して行つた。それでも百年がまだ来ない。しまいには、苔の生えた丸い石を眺めて、自分は女に欺だまされたのではなからうかと

思い出した。

すると石の下から斜はすに自分の方へ向いて青い茎が伸びて来た。見る間に長くなって丁度自分の胸のあたりまで来て留まった。と思うと、すらりと揺ぐ茎の頂いただきに、心持首を傾かたぶけていた細長い一輪の蕾つぼみが、ふっくらと瓣はなびらを開いた。真白な百合が鼻の先で骨に徹こたえる程匂った。そこへ遥はるかの上から、ほたりと露が落ちたので、花は自分の重みでふらふらと動いた。自分は首を前へ出して冷たい露の滴る、白い花瓣はなびらに接吻した。自分が百合から顔を離す拍子に思わず、遠い空を見たら、暁あかつきの星がたつ

た一つ瞬いていた。「百年はもう来ていたんだな」ところの時始めて気が付いた。

第二夜

こんな夢を見た。

和尚の室しつを退さががって、廊下伝いに自分の部屋へ帰ると
 行燈あんどうがぼんやり点ともっている。片膝かたひざを座蒲団の上に突いて、
 燈心を搔かき立てたとき、花の様な丁子ちようじがぱたりと朱塗の
 台に落ちた。同時に部屋がぱつと明かるくなった。

襖ふすまの画えは蕪村ぶそんの筆である。黒い柳を濃く薄く、遠近おちこち

とかいて、寒むそうな漁夫が笠を傾かたぶけて土手の上を通る。床には海かいちゆうもんじゆ中文珠の軸が懸かつている。焚たき残した線香が暗い方でいまだに臭におっている。広い寺だから森閑として、人気がない。黒い天井に差す丸行燈の丸い影が、仰向く途端に生きてる様に見えた。

立たて膝ひざをしたまま、左の手で座蒲団を捲めくつて、右を差し込んでみると、思った所に、ちゃんとあつた。あれば安心だから、蒲団をもとの如く直して、その上にどっかり坐まつた。

お前は侍である。侍なら悟れぬ筈はなからうと和尚が

云った。そう何日いっまでも悟れぬ所を以もつて見ると、御前は侍ではあるまいと言った。人間の屑くずじゃと言った。ははあ怒ったなと云って笑った。口惜くやしければ悟った証拠を持って来いと云ってふいと向むこうをむいた。怪けしからん。

隣の広間の床に据えてある置時計が次の刻を打つまでには、きつと悟って見せる。悟った上で、今夜又入室する。そうして和尚の首と悟りと引替にしてやる。悟らなければ、和尚の命が取れない。どうしても悟らなければならぬ。自分は侍である。

もし悟れなければ自刃じじんする。侍が辱はずかしめられて、生

きている訳には行かない。奇麗に死んでしまおう。

こう考えた時、自分の手は又思わず布団の下へ這入った。そうして朱鞘しゅさやの短刀を引き摺り出した。ぐっと束つかを握って、赤い鞘むこうを向へ払ったら、冷たい刃はが一度に暗い部屋で光った。凄すごいものが手元から、すうすうと逃げて行く様に思われる。そうして、悉ことごとく切先きつさきへ集まって、殺気を一点に籠こめめている。自分はこの鋭い刃が、無念にも針の頭とがの様に縮められて、九寸五分くすんごぶの先へ来て已やむを得ず尖とがってるのを見て、忽たちまちぐさりと遣り度たくになった。身体からだの血が右の手首の方へ流れて来て、握っている束がにち

やにちやする。唇が顫えた。

短刀を鞘へ収めて右脇へ引きつけて置いて、それから
 全伽を組んだ。——趙州曰く無と。無とは何だ。糞坊主
 めと齒嚙をした。

奥歯を強く咬み締めたので、鼻から熱い息が荒く出る。
 米嚙が釣って痛い。眼は普通の倍も大きく開けてやった。
 懸物が見える。行燈が見える。畳が見える。和尚の薬罐
 頭がありありと見える。鰐口を開いて嘲笑った声まで聞
 える。怪しからん坊主だ。どうしてもあの薬罐を首にし
 なくてはならん。悟ってやる。無だ、無だと舌の根で念

じた。無だと云うのにやっぱり線香の香においがした。何だ線香の癖に。

自分はいきなり拳骨を固めて自分の頭をいやと云う程擲なぐった。そうして奥歯をぎりぎりど噛んだ。両りようわき腋から汗が出る。脊中せなかが棒の様になった。膝の接目つぎが急に痛くなった。膝が折れたってどうあるものかと思った。けれども痛い。苦しい。無は中々出て来ない。出て来ると思うとすぐ痛くなる。腹が立つ。無念になる。非常に口惜くやしくなる。涙がほろほろ出る。一と思おもいに身を巨巖おおいわの上に打ぶつけて、骨も肉もめちやめちやに砕いてしまいたくな

る。

それでも我慢して凝じつと坐っていた。堪えがたい程切ないものを胸いに盛いれて忍んでいた。その切ないものが身体中の筋肉を下から持上げて、毛穴から外へ吹き出よう吹き出ようと焦あせるけれども、何処どこも一面ひつに塞ふさがって、まるで出口がない様な残刻極まる状態であつた。

その内に頭ちがいだなが変になつた。行燈あんどうも蕪村の画も、畳も、違ちが棚いだなも有あつて無い様な、無なくつて有ある様に見えた。と云つて無はちつとも現前こつぜんしない。ただ好加減いかげんに坐つていた様である。ところへ忽然こつぜん隣座敷の時計がチーンと鳴り

始めた。

はっと思った。右の手をすぐ短刀に掛けた。時計が二
つ目をチーンと打った。

第三夜

こんな夢を見た。

六つになる子供を負おぶってる。慥たしかに自分の子である。

只不思議な事には何時いつの間にか眼が潰つぶれて、青坊主あおぼうずにな
っている。自分が御前の眼は何時潰れたのかいと聞くと、
なに昔からさと答えた。声は子供の声に相違ないが、言
葉つきはまるで大人である。しかも対等だ。

左右は青田である。路は細い。鷺さぎの影が時々闇に差す。
 「田圃たんぼへ掛ったね」と脊中で云った。
 「どうして解る」と顔を後ろへ振り向ける様にして聞いたら、

「だって鷺が鳴くじゃないか」と答えた。

すると鷺が果して二声程鳴いた。

自分は我子ながら少し怖こわくなった。こんなものを脊負しよっていては、この先どうなるか分らない。どこか打遣うっちやる所はなかるうかと向うを見ると闇の中に大きな森が見えた。あすこならばと考え出す途端に、脊中で、

「ふふん」と云う声がした。

「何を笑うんだ」

子供は返事をしなかった。只

「御父さん、重いかい」と聞いた。
おとつ

「重かあない」と答えると

「今に重くなるよ」と云った。

自分は黙って森を目標めじるしにあるいて行つた。田の中の路

が不規則にうねって中々思う様に出られない。しばらく

すると二股ふたまたになった。自分は股の根に立って、一寸ちよつと休ん

だ。

「石が立ってる筈だがな」と小僧が云った。

成程八寸角の石が腰程の高さに立っている。表には左り日ヶ窪くぼ、右堀田原ほったはらとある。闇だのに赤い字が明かに見えた。赤い字は井守いもりの腹の様な色であった。

「左が好いだろう」と小僧が命令した。左を見ると最先さつきの森が闇の影を、高い空から自分等の頭の上へ抛なげかけていた。自分は一寸躊躇ちゆうちよした。

「遠慮しないでもいい」と小僧が又云った。自分は仕方なしに森の方へ歩き出した。腹の中では、よく盲目の癖に何でも知ってるなと考えながら一筋道を森へ近づいて

くると、脊中で、「どうも盲目は不自由で不可いいけなね」と云った。

「だから負おぶってやるから可いいじやないか」

「負ぶって貰って済まないが、どうも人に馬鹿にされて不可い。親にまで馬鹿にされるから不可い」

何だか厭いやになった。早く森へ行つて捨ててしまおうと思つて急いだ。

「もう少し行くと解る。——丁度こんな晩だったな」と脊中で独ひとりごと言の様に云っている。

「何が」と際どい声を出して聞いた。

「何がって、知ってるじゃないか」と子供は嘲けるあざ様に答えた。すると何だか知ってる様な気がし出した。けれども判然はつきりとは分らない。只こんな晩であつた様に思える。そうしてもう少し行けば分る様に思える。分つては大変だから、分らないうちに早く捨ててしまつて、安心しなくつてはならない様に思える。自分は益ますます足を早めた。雨は最先さつきから降っている。路はだんだん暗くなる。殆ほとんど夢中である。只脊中に小さい小僧が食付くっついていて、その小僧が自分の過去、現在、未来を悉ことごとく照して、寸分の事実も洩らさない鏡の様に光っている。しかもそれ

が自分の子である。そうして盲目である。自分は堪たまらな
くなつた。

「此ここ処だ、此ここ処だ。丁度その杉の根の処だ」

雨の中で小僧の声は判然はっきり聞えた。自分は覚ええず留つた。
何時しか森の中へ這入っていた。一間ばかり先にある黒
いものは慥に小僧の云う通り杉の木と見えた。

「御父さん、その杉の根の処だったね」

「うん、そうだ」と思わず答えてしまった。

「文化五年辰年だろう」

成程文化五年辰年らしく思われた。

「御前がおれを殺したのは今から丁度百年前だね」

自分はこの言葉を聞くや否や、今から百年前文化五年の辰年のこんな闇の晩に、この杉の根で、一人の盲目を殺したと云う自覚が、忽然^{こっぜん}として頭の中に起った。おれは人殺^{ひところし}であつたんだなと始めて気が附いた途端に、脊中の子が急に石地蔵の様に重くなつた。

第四夜

広い土間の真中まんなかに涼み台の様なものを据えて、その周囲まわりに小さい床几しょうぎが並べてある。台は黒光りに光っている。片隅には四角な膳を前に置いて爺さんが一人で酒を飲んでいゝ。肴さかなは煮しめらしい。

爺さんは酒の加減で中々赤くなっている。その上顔中沢々つやつやして皺しわと云う程のものはどこにも見当らない。只白

い髯ひげをありたけ生やしているから年寄と云う事だけは別わかる。自分は子供ながら、この爺さんの年は幾何いくつなんだろうと思った。ところへ裏の笥かけひから手桶ておけに水を汲んで来た神かみさんが、前垂まえだれで手を拭きながら、

「御爺おやさんは幾年いくつかね」と聞いた。爺さんは頬張ほくった煮にしめメを呑み込んで、

「幾年か忘れたよ」と澄はましていた。神さんは拭いた手を、細い帯の間に挟はさんで横から爺さんの顔を見て立っていた。爺さんは茶碗の様な大きなもので酒をぐいと飲んで、そうして、ふうと長い息を白い髯の間から吹き出し

た。すると神さんが、

「御爺さんの家は何処うちかね」と聞いた。爺さんは長い息を途中で切つて、

「臍へその奥だよ」と云つた。神さんは手を細い帯の間に突込んだまま、

「どこへ行くかね」と又聞いた。すると爺さんが、又茶碗の様な大きなもので熱い酒をぐいと飲んで前の様な息をふうと吹いて、

「あっちへ行くよ」と云つた。

「真直かい」と神さんが聞いた時、ふうと吹いた息が、

障子を通り越して柳の下を抜けて、河原の方へ真直に行
った。

爺さんが表へ出た。自分も後あとから出た。爺さんの腰に
小さい瓢ひょうたん箆せんがぶら下がっている。肩から四角な箱を腋わき
の下へ釣るしている。浅黄あさぎの股引ももひきを穿はいて、浅黄の袖無
しを着ている。足袋だけが黄色い。何だか皮で作った足
袋の様に見えた。

爺さんが真直に柳の下まで来た。柳の下に子供が三四
人居た。爺さんは笑いながら腰から浅黄の手拭を出した。
それを肝心かんじん絢よりの様に細長く絢よった。そうして地面じびたの真中

に置いた。それから手拭の周圍まわりに、大きな丸い輪を描かいた。しまいしんちゆうに肩にかけた箱の中から真鍮こしで製あめやらえた飴屋の笛を出した。

「今にその手拭が蛇になるから、見ておろう。見ておろう」と繰返して云った。

子供は一生懸命に手拭を見ていた。自分も見ていた。

「見ておろう、見ておろう、好よいか」と云いながら爺さんが笛を吹いて、輪の上をぐるぐる廻り出した。自分も手拭ばかり見ていた。けれども手拭は一向動かなかつた。爺さんは笛をぴいぴい吹いた。そうして輪の上を何遍

行つた。爺さんは時々「今になる」と云つたり、「蛇になる」と云つたりして歩いて行く。仕舞には、

「今になる、蛇になる、

きつとなる、笛が鳴る、」

と唄いながら、とうとう河の岸へ出た。橋も舟もないから、此処で休んで箱の中の蛇を見せるだろうと思つていと、爺さんはざぶざぶ河の中へ這入り出した。始めは膝位の深さであつたが、段々腰から、胸の方まで水に浸つかつて見えなくなる。それでも爺さんは

「深くなる、夜になる、

真直になる」

と唄いながら、どこまでも真直に歩いて行った。そうして髯も顔も頭も頭巾もまるで見えなくなってしまった。

自分は爺さんが向岸へ上がった時に、蛇を見せるだろうと思って、蘆あしの鳴る所に立って、たった一人何時までも待っていた。けれども爺さんは、とうとう上がって来なかつた。

第五夜

こんな夢を見た。

何でも余程古い事で、神代かみよに近い昔と思われるが、自分が軍いくさをして運悪く敗北まけた為に、生擒いけどりになつて、敵の大將の前に引き据えられた。

その頃ころの人はみんな脊せが高かつた。そうして、みんな長い髯ひげを生やしていた。革の帯を締めて、それへ棒の様

な剣つるぎを釣るつるしていた。弓は藤蔓ふじづるの太いのをそのまま用いた様に見えた。漆も塗ってなければ磨きも掛けてない。極めて素樸そぼくなものであった。

敵の大將は、弓の真中まんなかを右の手で握って、その弓を草の上へ突いて、酒甕さかがめを伏せた様なものの上に腰を掛けていた。その顔を見ると、鼻の上で、左右の眉が太く接続つながっている。その頃髪剃かみそりと云うものは無論なかつた。

自分は虜とりこだから、腰を掛ける訳に行かない。草の上に胡坐あぐらをかいていた。足には大きな藁沓わらぐつを穿ういていた。この時代の藁沓は深いものであった。立つと膝ひざ頭かしらまで

来た。その端の所は藁を少し編残して、房の様に下げて、歩くとばらばら動く様にして、飾りとしていた。

大将は篝火かがりびで自分の顔を見て、死ぬか生きるかと聞いた。これはその頃の習慣で、捕虜とりこにはだれでも一応はこう聞いたものである。生きると答えると降参した意味で、死ぬと云うと屈服しないと云う事になる。自分は一言死ひとことぬと答えた。大将は草の上に突いていた弓を向うへ抛なげて、腰に釣なびるした棒の様な剣をすりと抜き掛けた。それへ風に靡なびいた篝火が横から吹きつけた。自分は右の手を楓かえでの様に開いて、掌たなごころを大将の方へ向けて、眼の上

へ差し上げた。待てと云う相図である。大将は太い剣をかちやりと鞞さやに収めた。

その頃でも恋はあつた。自分は死ぬ前に一目思う女に逢いたいと云つた。大将は夜が明けて鶏とりが鳴くまでなら待つと云つた。鶏が鳴くまでに女を此処へ呼ばなければならぬ。鶏が鳴いても女が来なければ、自分は逢わずに殺されてしまう。

大将は腰を掛けたまま、篝火を眺めている。自分は大きな藁沓を組み合わせたまま、草の上で女を待っている。夜は段々更ける。

時々篝火が崩れる音がする。崩れる度に狼狽うろたえた様に焰ほのおが大將になだれかかる。真黒な眉の下で、大將の眼がびかぴかと光っている。すると誰たれやら来て、新しい枝を沢山火の中へ抛なげ込んで行く。しばらくすると、火がぱちぱちと鳴る。暗闇くらやみを弾き返す様な勇ましい音であった。

この時女は、裏の櫓うらの木に繋つないである、白い馬を引き出した。鬣たてがみを三度撫なでて高い脊せきにひらりと飛び乗った。鞍くらもない鐙あぶみもない裸はだかうま馬であった。長く白い足で、太腹を蹴けると、馬は一散に駆け出した。誰かが篝火かがを継ぎ足したので、遠くの空が薄明るく見える。馬はこの明るい

ものを目懸めがけて闇の中を飛んで来る。鼻から火の柱の様な
 息を二本出して飛んで来る。それでも女は細い足でしき
 りなしに馬の腹を蹴けっている。馬は蹄ひづめの音が宙で鳴る程
 早く飛んで来る。女の髪は吹流しの様に闇の中に尾を曳ひ
 いた。それでもまだ箒はたのある所まで来られない。
 すると真闇な道の傍はたで、忽たちまちこけこつこうと云う鶏とり
 の声がした。女は身を空そらぎ様に、両手に握たづった手綱なをうん
 と控えた。馬は前足の蹄を堅い岩の上に発はっ矢しと刻み込ん
 だ。

こけこつこうとにわとり鶏とりがまた一声鳴いた。

女はあつと云つて、緊めた手綱を一度に緩めた。馬は
 諸膝もろひざを折る。乗った人と共に真向まともへ前へのめつた。岩の
 下は深い淵ふちであつた。

蹄の跡はいまだに岩の上に残っている。鶏とりの鳴く真似
 をしたものは天探女あまのじやくである。この蹄の痕あとの岩に刻みつけ
 られている間、天探女は自分の敵かたきである。

第六夜

運慶うんけいが護国寺ごこくじの山門で仁王におうを刻んでいると云う評判だから、散歩ながら行って見ると、自分より先にもう大勢集まって、しきりに下馬評をやっていた。

山門の前五六間の所には、大きな赤松があつて、その幹が斜めに山門の蕘いらかを隠して、遠い青空まで伸びている。松の緑と朱塗の門が互いに照あつり合つて美事に見える。

その上松の位地が好い。門の左の端を眼障めざわりにならない様に、斜はすに切って行って、上になる程幅を広く屋根まで突出しているのが何となく古風である。鎌倉時代とも思われる。

ところが見ているものは、みんな自分と同じく、明治の人間である。その中でも車夫が一番多い。辻待つじまちをして退屈だから立っているに相違ない。

「大きなもんだなあ」と云っている。

「人間を拵こしらえるよりも余つ程骨が折れるだろう」とも云っている。

そうかと思うと、「へえ仁王だね。今でも仁王を彫るのかね。へえそうかね。私わっしや又仁王はみんな古いのばかりかと思つてた」と云つた男がある。

「どうも強そうですね。なんだつてえますぜ。昔から誰が強いつて、仁王程強い人あ無いつて云いますぜ。何でも日本武尊やまとたけのみことよりも強いんだつてえからね」と話しかけた男もある。この男は尻を端折はしよつて、帽子を被かぶらずにいた。余程無教育な男と見える。

運慶は見物人の評判には委細頓とんじやく着やくなく鑿のみと槌つちを動かしている。一向振り向きもしない。高い所に乗つて、仁

王の顔の辺あたりをしきりに彫り抜いて行く。

運慶は頭に小さい烏帽子えぼしの様なものを乗せて、素袍すおうだか何わかだか別らない大きな袖を脊中で括くわっている。その様子が如何にも古くさい。わいわい云ってる見物人とはまるで釣り合が取れない様である。自分はどうして今時分まで運慶が生きているのかなと思った。どうも不思議な事があるものだと考えながら、やはり立って見ていた。

然し運慶の方では不思議とも奇体とも頓と感じ得ない様子で一生懸命ほんに彫あっている。仰向あおむいてこの態度を眺めていた一人の若い男が、自分の方を振り向いて、

「さすがは運慶だな。眼中に我々なしだ。天下の英雄はただ仁王と我れとあるのみと云う態度だ。天晴れだ」と云って賞め出した。

自分はこの言葉を面白いと思った。それで一寸若い男の方を見ると、若い男は、すかさず、

「あの鑿と槌の使い方を見給え。大自在の妙境に達している」と云った。

運慶は今太い眉を一寸の高さに横へ彫り抜いて、鑿の齒を豎たてに返すや否や斜はすに、上から槌を打ち下した。堅い木を一と刻みに削って、厚い木屑が槌の声に応じて飛

んだと思つたら、小鼻のおつ開いた怒り鼻の側面が忽ち浮き上がつて来た。その刀とうの入れ方が如何にも無遠慮であつた。そうして少しも疑念を挟さしはさんでおらん様に見えるた。

「能よくああ無造作に鑿うを使って、思う様な眉まみえや鼻はなが出るものだな」と自分はあるあまり感心したから独言ひとりごとの様ように言つた。するとさつきさつきの若い男が、

「なに、あれは眉まみえや鼻はなを鑿うで作るんじゃない。あの通りの眉や鼻が木の中に埋うまっているのを、鑿うと槌つちの力で掘り出すまでだ。まるで土の中ちのちから石を掘り出す様なもの

だから決して間違う筈はない」と云った。

自分はこの時始めて彫刻とはそんなものかと思ひ出した。果してそうなら誰にでも出来る事だと思ひ出した。それで急に自分も仁王が彫つてみたくなつたから見物をやめて早速家へ歸つた。

道具箱から鑿と金槌を持ち出して、裏へ出てみると、先達せんだつての暴風あらしで倒れた檜かしを、薪まきにする積りで、木挽こびきに挽ひかせた手頃な奴が、沢山積んであつた。

自分は一番大きいのを選んで、勢いよく彫り始めてみたが、不幸にして、仁王は見当らなかつた。その次のに

も運悪く掘り当る事が出来なかった。三番目のにも仁王は居なかった。自分は積んである薪を片っ端から彫つてみたが、どれもこれも仁王を蔵かくしているのはなかった。遂に明治の木には到底仁王は埋うまっていないものだと悟つた。それで運慶が今日まで生きている理由も略解ほろつた。

第七夜

何でも大きな船に乗っている。

この船が毎日毎夜すこしの絶間なく黒い煙けぶりを吐いて浪を切って進んで行く。凄すさまじい音である。けれども何処へ行くんだか分らない。只波の底から焼火箸やけひばしの様な太陽が出る。それが高い帆柱の真上まで来てしばらくかか掛っているかと思うと、何時いつの間にか大きな船を追い越して、

先へ行つてしまふ。そうして、しまいには焼火箸の様に
じゅつといつて又波の底に沈んで行く。その度たんびに蒼あおい
波が遠くの向うで、蘇枋すおうの色に沸き返る。すると船は凄
じい音を立ててその跡を追掛おっかけて行く。けれども決して
追附おっつかない。

ある時自分は、船の男を捕つらまえて聞いてみた。

「この船は西へ行くんですか」

船の男は怪訝けげんな顔をして、しばらく自分を見ていたが、

やがて、

「何故なぜ」と問い返した。

「落ちて行く日を追懸おっかける様だから」

船の男は呵々からからと笑った。そうして向うの方へ行つてしまつた。

「西へ行く日の、果は東か。それは本真ほんまか。東出る日の、御里は西か。それも本真か。身は波の上。戢枕かじまくら。

流せ流せ」と囃はやしている。舳へこぎへ行つて見たら、水夫が大勢寄つて、太い帆綱を手繰たぐるっていた。

自分は大変心細くなつた。何時陸おきへ上がれる事か分らない。そうして何処へ行くのだから知れない。只黒い煙けぶりを吐いて波を切つて行く事だけは慥たしかかである。その波

は頗すこぶる広いものであつた。際限もなく蒼く見える。時には紫にもなつた。只船の動く周囲まわりだけは何時でも真白まっしろに泡を吹いていた。自分は大変心細かつた。こんな船にいるより一層いっそ身を投なげて死んでしまおうかと思つた。

乗合は沢山居た。大抵は異人の様であつた。然し色々な顔をしていた。空が曇つて船が揺れた時、一人の女が欄てすりに倚よりかかつて、しきりに泣いていた。眼を拭く半巾ハンケチの色が白く見えた。然し身体からだには更紗さらさの様な洋服を着ていた。この女を見た時に、悲しいのは自分ばかりではないのだと気が附いた。

ある晩甲板の上に出て、一人で星を眺めていたら、一人の異人が来て、天文学を知ってるかと尋ねた。自分はつまらないから死のうとさえ思っている。天文学などを知る必要がない。黙っていた。するとその異人が金きんぎゆう牛宮うきゆうの頂いただきにある七星しちせいの話をして聞かせた。そうして星も海もみんな神の作ったものだと言った。最後に自分に神を信仰するかと尋ねた。自分は空を見て黙っていた。

或時サローンに這入ったら派出な衣裳を着た若い女が向うむきになって、洋琴ピアノを弾いていた。その傍に脊せいの高たかい立派な男が立って、唱歌を唄っている。その口が大変

大きく見えた。けれども二人は二人以外の事にはまるで頓とんじやく着していかない様子であった。船に乗っている事さえ忘れていた様であった。

自分は益ますますつまらなくなつた。とうとう死ぬ事に決心した。それである晩、あたりに人の居ない時分、思い切つて海の中へ飛び込んだ。ところが——自分の足が甲板を離れて、船と縁が切れたその刹那せつなに、急に命が惜くなつた。心の底からよせばよかつたと思つた。けれども、もう遅い。自分は厭いやでも応でも海の中へ這入らなければならぬ。只大變高く出来ていた船と見えて、身体は船

を離れたけれども、足は容易に水に着かない。然し捕ま^{つか}えるものがないから、次第々々に水に近附いて来る。いくら足を縮めても近附いて来る。水の色は黒かった。

そのうち船は例の通り黒い煙^{けぶり}を吐いて、通り過ぎてしまった。自分は何処へ行くんだか判らない船でも、やっぱり乗っている方がよかったと始めて悟りながら、しかもその悟りを利用する事が出来ずに、無限の後悔と恐怖とを抱いて黒い波の方へ静かに落ちて行つた。

第八夜

床屋の敷居を跨またいだら、白い着物を着てかたまっていた三四人が、一度に入らっしゃいと云った。

真中に立って見廻すと、四角な部屋である。窓が二方に開いて、残る二方に鏡が懸っている。鏡の数を勘定したら六つあった。

自分はその一つの前へ来て腰を卸した。すると御尻が

ぶくりと云った。余程坐り心地が好く出来た椅子である。鏡には自分の顔が立派に映った。顔の後には窓が見えた。それから帳場格子ちょうばごうしが斜はすに見えた。格子の中には人がいなかった。窓の外を通る往來おうらいの人の腰から上がよく見えた。

庄太郎が女を連れて通る。庄太郎は何時いつの間にかパナマの帽子を買って被かぶっている。女も何時の間いつに拵こしらえたものやら。一寸ちよつと解らない。双方共得意の様であつた。よく女の顔を見ようと思つた。うちに通過ぎてしまった。

豆腐屋が喇叭らっぱを吹いて通つた。喇叭を口へ宛あてがつていゝるんで、頬ほぺたが蜂はちに螫さされた様に膨ふくれていた。膨れた

まんまで通り越したものだから、気掛りで堪らない。生涯蜂に螫されている様に思う。

芸者が出た。まだ御化粧おつくりをしていない。島田の根が緩ゆるんで、何だか頭に締りがない。顔も寝ぼけている。色沢いろつやが気の毒な程悪い。それで御辞儀をして、どうも何とかですと云ったが、相手はどうしても鏡の中へ出て来ない。

すると白い着物を着た大きな男が、自分の後ろへ来て、はさみ鋏くしと櫛くしを持って自分の頭を眺め出した。自分は薄い髭ひげを振ひねって、どうだろう物になるだろうかと尋ねた。白い男は、何なにも云わずに、手に持った琥珀色こはくいろの櫛で軽く自

分の頭を叩いた。

「さあ、頭もだが、どうだろう、物になるだろうか」と自分は白い男に聞いた。白い男はやはり何も答えずに、ちやきちやきと鋏を鳴らし始めた。

鏡に映る影を一つ残らず見る積りで眼を睜みはっていたが、鋏の鳴るたんびに黒い毛が飛んで来るので、恐ろしくなつて、やがて眼を閉じた。すると白い男が、こう云った。

「旦那は表の金魚売を御覧なすつたか」

自分は見ないと云った。白い男はそれぎりで、頻しきりと

鋏を鳴らしていた。すると突然大きな声で危険あぶねえと云ったものがある。はっと眼を開けると、白い男の袖の下に自転車の輪が見えた。人力じんりきの梶棒かじぼうが見えた。と思うと、白い男が両手で自分の頭を押えてうんと横へ向けた。自転車と人力車はまるで見えなくなつた。鋏の音がちやきちやきする。

やがて、白い男は自分の横へ廻つて、耳の所を刈り始めた。毛が前の方へ飛ばなくなつたから、安心して眼を開けた。粟餅や、餅やあ、餅や、と云う声がすぐ、そこです。小さい杵きねをわざと臼うすへ中あてて、拍子を取って餅

を搗ついている。栗餅屋は子供の時に見たばかりだから、一寸様子が見たい。けれども栗餅屋は決して鏡の中に出て来ない。只餅を搗く音だけする。

自分はあるたけの視力で鏡の角を覗き込む様にして見た。すると帳場格子のうちに、いつの間にか一人の女が坐っている。色の浅黒い眉毛まみえの濃い大柄な女で、髪をいちようがえ銀杏返しに結って、黒繻子くろじゆすの半襟はんえりの掛った素裕すあわせで、立膝のまま、札さつの勘定さつをしている。札は十円札らしい。女は長い睫まつげを伏せて薄い唇くちびるを結んで一生懸命に、札の数を読んでいるが、その読み方がいかにも早い。しかも札

の数はどこまで行っても尽きる様子がない。膝の上に乗っているのは高々百枚位だが、その百枚がいつまで勘定しても百枚である。

自分は茫然としてこの女の顔と十円札を見詰めていた。すると耳の元で白い男が大きな声で「洗いましょう」と云った。丁度うまい折だから、椅子から立ち上がるや否や、帳場格子の方を振り返って見た。けれども格子のうちには女も札も何にも見えなかった。

代を払って表へ出ると、門口かどぐちの左側に、小判おけなりの桶おけが五つばかり並べてあって、その中に赤い金魚や、斑入ふいり

の金魚や、痩せた金魚や、肥った金魚が沢山入れてあつた。そうして金魚売がその後うしろにいた。金魚売は自分の前に並べた金魚を見詰めたまま、頬杖ほとんを突いて、じっとしている。騒がしい往來の活動には殆ど心ほとんを留めていない。自分はしばらく立ってこの金魚売を眺めていた。けれども自分が眺めている間あいだ、金魚売はちつとも動かなかつた。

第九夜

世の中が何となくざわつき始めた。今にも戦争いくさが起り
 そうに見える。焼け出された裸はだかうま馬が、夜昼となく、屋
 敷まわりの周囲あばを暴れ廻ると、それを夜昼となく足軽あしがる共が犇ひしめ
 きながら追掛けている様な心持がする。それでいて家の
 うちしんは森として静かである。

家いえには若い母と三つになる子供がいる。父は何処どこかへ

行つた。父が何処かへ行つたのは、月の出ていない夜中であつた。床の上で草鞋わらじを穿はいて、黒い頭巾かぶを被かぶつて、勝手口から出て行つた。その時母の持つていた雪洞ぼんぼりの灯ひが暗い闇に細長く射して、生垣の手前ひのきにある古い檜ひのきを照した。

父はそれきり帰つて来なかつた。母は毎日三つになる子供に「御父様は」と聞いている。子供は何とも云わなかつた。しばらくしてから「あっち」と答える様になつた。母が「何日い御帰り」と聞いてもやはり「あっち」と答えて笑つていた。その時は母も笑つた。そうして「今

に御帰り」と云う言葉を何遍となく繰返して教えた。けれども子供は「今に」だけを覚えたのみである。時々は「御父様は何処どこ」と聞かれて「今に」と答える事もあつた。

夜になって、四隣あたりが静まると、母は帯を締め直して、鮫鞘さめざやの短刀を帯の間へ差して、子供を細帯で脊中へ脊負しよつて、そつと潜くぐりから出て行く。母はいつでも草履を穿いていた。子供はこの草履の音を聞きながら母の脊中で寝てしまう事もあつた。

土塀つちべいの続いている屋敷町を西へ下くだつて、だらだら坂を

降り尽すと、大きな銀杏いちようがある。この銀杏を目標めじるしに右に切れると、一丁ばかり奥に石の鳥居がある。片側は田圃たんぼで、片側は熊笹ばかりの中を鳥居まで来て、それを潜くぐり抜けると、暗い杉の木立になる。それから二十間ばかり敷石伝いに突き当たると、古い拝殿の階段の下に出る。鼠色に洗い出された賽銭箱さいせんばこの上に、大きな鈴すずの紐ひもがぶら下って昼間見ると、その鈴の傍そばに八幡宮と云う額が懸っている。八の字が、鳩が二羽向いあった様な書体に出てくるのが面白い。その外にも色々の額がある。大抵は家中のものの射抜いた金的を、射抜いたものの名前に添え

たのが多い。偶たまには太刀を納めたものもある。

鳥居を潜ると杉こずえの梢こずえで何時いつでも梟ふくろうが鳴いている。

そうして、冷飯草履ひやめしぞうりの音がぴちやぴちやする。それが拝

殿の前で已やむと、母は先まず鈴を鳴らして置いて、直すぐにし

やがんで柏手かしわでを打つ。大抵はこの時梟が急に鳴かなくな

る。それから母は一心不乱に夫の無事を祈る。母の考え

では、夫が侍であるから、弓矢の神の八幡へ、こうやっ

て是非がない願がんを掛けたら、よもや聴かれぬ道理はなかる

うと一いち函づに思い詰めている。

子供は能よくこの鈴の音で眼を覚まして、四あたり辺を見たと

真暗まっくらだものだから、急に脊中で泣き出す事がある。その時母は口の内で何か祈りながら、脊を振ってあやそうとする。すると旨うまく泣き已む事もある。又益ますます烈れつしく泣き立てる事もある。いずれにしても母は容易に立たない。一通り夫の身の上を祈ってしまふと、今度は細帯を解いて、脊中の子を摺ずり卸おろすように、脊中から前へ廻して、両手に抱きながら拜殿を上って行って、「好い子だから、少しの間、待って御出おいでよ」ときつと自分の頬を子供の頬へ擦すり附ける。そうして細帯を長くして、子供を縛くって置いて、その片端を拜殿の欄干らんかんに括くり附ける。そ

れから段々を下りて来て二十間の敷石を徃いったり来たり御百度を踏む。

拜殿に括りつけられた子は、暗闇の中で、細帯の丈たけのゆるす限り、広縁の上を這はい廻まわっている。そう云う時は母に取って、甚だ楽な夜である。けれども縛むすった子にひいひい泣かれると、母は気が気でない。御百度の足が非常に早くなる。大変息が切れる。仕方のない時は、途中で拜殿へ上あって来て、色々すかして置いて、又御百度を踏み直す事もある。

こう云う風に、幾晩となく母が氣を揉もんで、夜よの目も

寝ずに心配していた父は、とくの昔に浪士の為に殺されていたのである。

こんな悲い話を、夢の中で母から聞いた。

第十夜

庄太郎が女に攫さらわれてから七日目なのかの晩にふらりと帰つて来て、急に熱が出てどつと、床に就いていると云つて健さんが知らせに来た。

庄太郎は町内一の好男子で、至極善良な正直者である。ただ一つの道楽がある。パナマの帽子を被かぶつて、夕方になると水菓子屋の店先へ腰をかけて、往來おうらいの女の顔を眺

めている。そうして頻しきりに感心している。その外にはこれと云う程の特色もない。

あまり女が通らない時は、往來を見ないで水菓子を見ている。水菓子には色々ある。水蜜桃や、林檎りんごや、枇杷びわや、バナナを奇麗に籠に盛って、すぐ見舞物みやげものに持って行く様に二列に並べてある。庄太郎はこの籠を見ては奇麗だと云っている。商売をするなら水菓子屋に限ると云っている。その癖自分はパナマの帽子を被ってぶらぶら遊んでいる。

この色がいいと云って、夏蜜柑などを品評する事もあ

る。けれども、曾かつて銭を出して水菓子を買った事がない。只では無論食わない。色ばかり賞めている。

ある夕方一人の女が、不意に店先に立った。身分のある人と見えて立派な服装をしている。その着物の色がひどく庄太郎の気に入った。その上庄太郎は大変女の顔に感心してしまった。そこで大事なパナマの帽子を脱とって丁寧に挨拶をしたら、女は籠詰の一番大きいのを指して、これを下さいと云うんで、庄太郎はすぐその籠を取って渡した。すると女はそれを一寸提げてみて、大変重い事と云った。

庄太郎は元來閑人ひまじんの上に、頗すこぶる気作きやくな男だから、ではお宅まで持って参りましようかと云つて、女と一所に水菓子屋を出た。それぎり帰つて来なかつた。

如何いかな庄太郎でも、余あんまり吞気のんき過ぎる。只事ただごとじゃ無かろうと云つて、親類や友達が騒さわぎ出していると、七日目の晩になつて、ふらりと帰つて来た。そこで大勢寄つてたかつて、庄さん何ど処こへ行つていたんだいと聞くと、庄太郎は電車へ乗つて山へ行つたんだと答えた。

何でも余程長い電車に違ちがひない。庄太郎の云う所によると、電車を下りるとすぐと原へ出たそうである。非常

に広い原で、何処を見廻しても青い草ばかり生えていた。女と一所に草の上を歩いて行くと、急に絶壁きりぎしの天辺てっぺんへ出た、その時女が庄太郎に、此処ここから飛び込んで御覧なさいと云った。底を覗のぞいて見ると、切岸きりぎしは見えるが底は見えない。庄太郎は又パナマの帽子を脱いで再三辞退した。すると女が、もし思い切って飛び込まなければ、豚に舐なめられますが好う御座んすかと聞いた。庄太郎は豚と雲右衛門が大嫌だいきらひだった。けれども命には易かえられないと思つて、やっぱり飛び込むのを見合せていた。ところへ豚が一匹鼻を鳴らして来た。庄太郎は仕方なしに、持つ

ていた細い檳榔樹びんろうじゆの洋杖ステツキで、豚の鼻頭はなづらを打ぶった。豚はぐ
 うと云いながら、ころりと引つ繰り返つて、絶壁きりぎしの下へ
 落ちて行つた。庄太郎はほつと一と息接ついでいると又一
 匹の豚が大きな鼻を庄太郎に擦すり附けに来た。庄太郎は
 已やむを得ず又洋杖ステツキを振り上げた。豚はぐうと鳴いて又
 真逆まっさかさま様に穴の底へ転げ込んだ。すると又一匹あらわれた。
 この時庄太郎は不ふ凶と気が附いて、向うを見ると、遥はるかの
 青草原あおくさばらの尽きる辺あたりから幾万匹か数え切れぬ豚が、群むれを
 なして一直線に、この絶壁きりぎしの上に立っている庄太郎を
 見懸めがけて鼻を鳴らしてくる。庄太郎は心しんから恐縮した。

けれども仕方がないから、近寄ってくる豚の鼻頭はなづらを、一つ一つ丁寧に檳榔樹の洋杖で打ぶっていた。不思議な事に洋杖が鼻へ触りさえすれば豚はころりと谷の底へ落ちて行く。覗いて見ると底の見えない絶壁きりぎしを、逆さになった豚が行列して落ちて行く。自分がこの位多くの豚を谷へ落したかと思うと、庄太郎は我ながら怖こわくなった。けれども豚は続々くる。黒雲に足が生えて、青草を踏み分ける様な勢いで無尽蔵に鼻を鳴らしてくる。

庄太郎は必死の勇を振って、豚の鼻頭はなづらを七日六晩むぼん叩いた。けれども、とうとう精根が尽きて、手が蒟蒻こんにやくの様

に弱って、仕舞しまいに豚に舐められてしまった。そうして絶壁きりぎしの上へ倒れた。

健さんは、庄太郎の話を此処までして、だから余りあんま女を見るのは善くないよと云った。自分も尤もつともだと思つた。けれども健さんは庄太郎のパナマの帽子が貰いたいと云っていた。

庄太郎は助かるまい。パナマは健さんのものだろう。

日本文学電子図書館

文鳥・夢十夜

著 者 夏目漱石

作成者 宮澤一郎

底 本 新潮文庫

日本文学電子図書館